

かたりあふ通信

2010.11.7
No.762

フロベールの言葉

その電話があったのは、フロベールの「ボヴァリー夫人」を読み終わって、次の「純情な女」に入ったところだった。

「けれども彼女は幸福だった。環境の穏やかさによって、彼女の悲しみは和らげられたのであった。」「フロベール「純情な女」、日集英社版「世界文学全集」④B、集英社、1986年、P.324)。

「ボヴァリー夫人」より「純情な女」の方が、私はいいなあなど思っていた、そんな時、電話が鳴った。

「……」
「はい、買い取りはします。買い取りはしますが……」
「どんな本ですか？」

「いい本ですわね。うちで引き取る時には、三千円というところなんです。実際に見せていただいて、三千円プラスマイナスになります。でもこんな本を一度手放したら、今度同じ本を揃えようと思ってもなかなか大変だと思えますから、手元に置いておかれたらどうかと思います。それか、誰か親戚の人で、その本を読みたいという人がいたら、その方に譲ってあげるのはいかがでしょうか……」

「……」
「……」
「……」

「どんな本を読んだらよいかとおっしゃるのですか？ モンテーニュをお読みなさい。ゆっくりと。そして腰をすえて！ 彼はあなたの心を鎮めてくれます。……あなたはきつと彼が好きにおなりになります。(以下略) フロベールからルロワイエ・ド・シャンピエ嬢宛書簡一八五七年六月クワッセにて」(「ロモンテーニュ随想録」④B、白水社、1982年、P.111)。

「はい！」
両手で本を持ったまま思わず、と、うなづく私だった。